

いのちの森との共生

新潟県山野草をたずねる会会長
(環境庁・環境カウンセラー)

小日向孝



新潟県山野草をたずねる会機関紙
第15号
会員数120名(12/8現)
事務局
長岡市下条町1406-6
印 刷
(有)佐藤印刷所
TEL 32-0681

戦後日本人は自然を破壊し、全てが命ともののつながりで成立していることを忘れ日本人の心も失われたと指摘されています。一方、便利さと快樂を追い求め、人々の心の崩れも進む中で履き違えられた自由や社会秩序の崩壊傾向とともに、ふるさとの木である地域固有の本物の森が少なくなっています。まさに環境破壊と人々の心の崩壊は同根です。

日本人の心それは、『自然と一体化』した心で自然を恐れ、おののき、畏敬する心なのです。日本社会は物の豊かさと豊かな食生活の中で人間と自然の事物との関わりを希薄なものにし人間を孤立化させる傾向もあります。また、情の濃やかさ、温かさ、他への思いやりの心と共に子供の家庭での躾をも失っています。さらに人々の自然離れ、商品文化の流入、甘えと依存の社会構造となっています。

「本物の緑の育たないところには本物の人間は育たない」のです。そのためには全ての人達が環境問題を考え、いのちの森の回復に取り組むことが大切です。国土の六十七%は森林ですが四十一%はスギ等の植林です。森は、全ての生き物のいのちの根源で地球上に生えた私達の髪の毛でもあり、地球上でただ一つ再生可能な資源です。

来年度から『にいがた『緑』の百年物語』——木を植える県民運動——がはじまります。この運動の意味は、県民二百六十万のいのちを守り心を育てることにあります。百年を継続して二百五十年のいのちの木を植え、いのちと心の面で、県民のみんながつくる千年のふるさとの森づくりです。

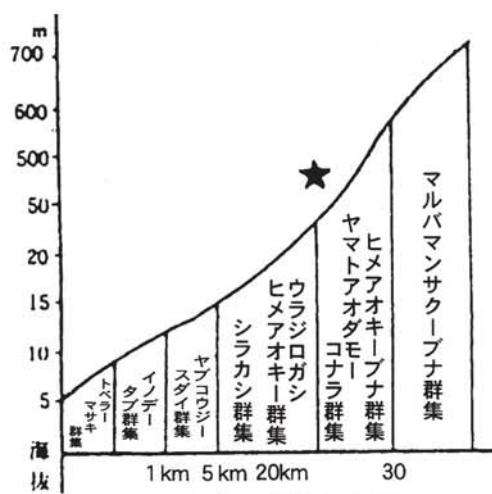
二十世紀はいのちの森の破壊でしたが、二十一世紀は『持続可能な生きた環境としてのいのちの森の回復と人を育てる』世紀です。人々のこれまでの自然との対決思想や利己主義エゴを改め、自然と共存し共生・共栄するというビオトープ

精神やエコロジカルな自然観に立つ実践行動です。本物の森は、人を生かし人を育てます。それは『櫻の木一本三家族を養う』ともいわれるよう人々の持続可能な生存環境としてあるいは人々の心の問題も含めた末永い生活の安定と安全が保障されるのだと思います。

県内の海拔三十m内外域の潜在自然植生のヤブツバキクラスの、タブノキ、スダジイ、アカガシ、ウラジロガシ、シロダモなどの冬も緑の常緑広葉樹林(照葉樹林)は、年間の温量指数が一〇〇内外の比較的高い内陸型の気候下に発達します。また、海拔四十~百mはブナクラスのコナラ、百m以上では、ブナ、シラカバ、ケヤキなどの夏緑広葉樹林(落葉広葉樹林)でマクロな植物社会学的な位置付けが可能となっています。

地域固有のみどりの自然が人々の遊びの場としてあるいは新しい文化を創造するボテンシャル(可能性、潜在力)を残すことが今求められています。それは、最も間違えない長持ちのする生命の共存者である潜在自然植生の構成種による森の回復です。潜在自然植生の構成種といふるさとの木によるふるさとの森づくりは古くて新しい前向きな環境づくりであり、地球環境づくりとしての足元から環境づくりです。経費が安くしかも長持ちのする本物の緑を回復し、地域の人々と生生発展し良い人間を育むことのできるふるさとの森づくりを推進したいものです。『にいがた『緑』の百年物語』——木を植える県民運動——が実りある運動となることを願っています。

『文明の前に豊かな森があつて、文明のあとに砂漠が残つた』の世界四大文明の発祥地①黄河—中国②ナイル川—エジプト③インダス河—インド④チグリス、ユーフラテス、メソポタミア—イラク)のようなことにならないように、持続可能な社会と本物の緑豊かな生活環境(生存環境)の実現といのちの森との共生や緑の遺産づくりをめざして掛け替えのないふるさとの本物の森を『回復し守り、伝え』ていきたいと思います。



平成12年12月8日

『蒼紫の森』の再生



「蒼紫の森」の再生

太田 和子

地域の自然植生に合った木を植えることで、本当の自然を回復していくことを、本会に入会させていただい、という本会に入会させていただい、早二年がたちました。先輩の方々との交わりや木や草とのふれあいが楽しく参加する度に感激しています。

今度の行事は「お山」と愛称されている「悠久山、蒼紫の森」に木を植えるとのことでした。「神社」なら木は充



今回の植樹は蒼紫神社のご神木にもなっているアカガシとシラカシ、ウラジロガシ、シロダモを植えました。私達の力は限られていますが、この一步によつて、「悠久山、蒼紫の森」が回復、再生され、人間と植物、動物が共生できる自然ができると思つています。一汗かいた仕事の後の会話とお茶はたいへんおいしいものでした。

木々達の成長が楽しみでお山に足を運ぶ回数が増えそうです。来年も皆様、ご一緒致しましよう。

分と少し不思議に思いながら、現場に行つてみてようやくその意味がわかりました。神社の裏手、杉の木立は立派ですが、アオサギ、ゴイサギの「ふん」で枯れている杉が多数あるのです。また、かつては杉の葉は地域の人々の燃料として利用されていて手入れの行き届いた森だつたそうですが、今は利用されなくなり「荒れた森」になつてしましました。

今回の植樹は蒼紫神社のご神木にもなっているアカガシとシラカシ、ウラジロガシ、シロダモを植えました。

私達の力は限られていますが、この一步によつて、「悠久山、蒼紫の森」が

年中、風の往復ビンタをくらつている様なものだから、住民は冬の寒さを感じます。一汗かいた仕事の後の会話とお茶はたいへんおいしいものでした。

木々達の成長が楽しみでお山に足を運ぶ回数が増えそうです。来年も皆様、ご一緒致しましよう。

地域の自然植生に合つた木を植えることで、本当の自然を回復していくことを、本会に入会させていただい、という本会に入会させていただい、早二年がたちました。先輩の方々との交わりや木や草とのふれあいが楽しく参加する度に感激しています。

今度の行事は「お山」と愛称されている「悠久山、蒼紫の森」に木を植えるとのことでした。「神社」なら木は充

ます。ひとり語り「森から来た魚」を見てきました。題名からして、これぞ小日向先生から、いつも教わつてゐる「自然との共生」？良いお話を聞けるかも知れないと、すつ飛んで出掛けました。

北海道、襟裳岬が舞台でした。えりの子供達は、「海は赤いもんだ」と思つて育ちました。きな粉の様な、細かい赤い土が、風で飛ばされて海を染めていたのです。鮭が寄りつかなくなったり、昆布は、「泥昆布」状態。岬は、一年中、風の往復ビンタをくらつている様なものだから、住民は冬の寒さを感じます。一汗かいた仕事の後の会話とお茶はたいへんおいしいものでした。

木々達の成長が楽しみでお山に足を運ぶ回数が増えそうです。来年も皆様、ご一緒致しましよう。

森から来た魚

鈴木千代枝

先日、大変感動したことを書いてみます。

ひとり語り「森から来た魚」を見てきました。題名からして、これぞ小日向先生から、いつも教わつてゐる「自然との共生」？良いお話を聞けるかも知れないと、すつ飛んで出掛けました。

北海道、襟裳岬が舞台でした。えりの子供達は、「海は赤いもんだ」と思つて育ちました。きな粉の様な、細かい赤い土が、風で飛ばされて海を染めていたのです。鮭が寄りつかなくなったり、昆布は、「泥昆布」状態。岬は、一年中、風の往復ビンタをくらつている様なものだから、住民は冬の寒さを感じます。一汗かいた仕事の後の会話とお茶はたいへんおいしいものでした。

木々達の成長が楽しみでお山に足を運ぶ回数が増えそうです。来年も皆様、ご一緒致しましよう。

会に参加して

白井 マサ

ある雑誌に今後も人類が永遠に地球上に生きていこうと思つたらもつと真剣に自然との共生を考えないと手遅れになる。そのためには自然をお手本として人間を育てなければ、又人間だけではなく森羅万象すべてに迷惑をかけるような生き方はしない様にと書いてありました。会の主旨であるいのちの森の回復と共生共榮の大切さをひしひしと感じさせられます。

植物が大好きで山野草も育てゝ見ましたががなかなか良く育てる事が出来ません。でも自然の中の花々の美しさを見ると心がほつとします。

やはり野に置けレンゲ草とはよく言つたものと思います。

日頃何気なく通つて居りました長高のカシの大木や郡龜の大木も小日向先生のお話を聞き今までの無関心に驚きました。私は植物については他の人達よりもつとつと努力をしなければと思いました。

先日の力や藪も先生のお話しでは囲りと平らだったのがあれだけ差がつくとのこと驚きました。

先日の力や藪も先生のお話しでは囲りと平らだったのがあれだけ差がつくとのこと驚きました。

昨年から参加して四回しか出席して居りませんがいろいろの事を教えていたところ驚きました。

一度こわした自然を取り戻し、自分達の子孫には、昔のような豊かな山や浜や海を手渡そうと、今日も努力が続けられているのです。月月襟裳の春はあくまでもない月月歌いながら帰宅しました。

平成12年度活動報告

新潟県山野草をたずねる会(新潟県植生研究会)

★テーマ 植物の生きざまに学ぶ

- ・植物社会学を基礎とした植生生態学の見方での観察を重視した総合的な活動
- ・いのちの森との共生、地域環境の保護保全、回復を目指した活動
- ・自然の恵みを体験する活動

1 早春の山野草を訪ねる会兼総会

- ・柏崎・西山方面 4月8日(土)(37名)

2 春の野を歩き山菜を食べる会

- ① 小木ノ城・国上方面 4月23日(日)(23名) ② 柏崎・柿崎方面 5月14日(日)(27名)

3 みどりを育てる会—いのちの森との共生、本物のみどりの環境とまちづくりを目指す。

- ふるさとの木によるふるさとの森づくり

- ・ドングリハウスの組み立て 4月21日(金)・22日(土)

- ・樹木の播種ドングリ拾い 4月23日(日)・5月14日(日)・16日(日)

- ・ドングリハウス周囲草刈り 6月2日(金)・3日(土)

- ・育苗管理 9月9日(土)(15名)・10月14日(土)(16名)・11月11日(土)(8名)

- ・植樹準備作業 8月11日(金)・16日(水)・18日(金)

- ・蒼紫の森再生植樹 8月19日(土)(31名)

- ・附属長岡小学校100年の森植樹 10月7日(土)(11名)

- ・湯沢みどりの会交流植樹 10月22日(日)(6名)

- ・日中友好万里の長城森の再生植樹 5月4日(木)(12名)

4 夏の植物観察会兼合宿研修

<合宿研修>

- ・研修下見 6月6日(火)

- ・高峰高原・奥蓼科方面 7月22日(土)～23日(日)(35名)

5 秋の野に学ぶ(キノコの識別及びドングリ拾い—コナラ・ナラガシワ・ウラジロガシ・アカガシ・シラカシ・ブナ・シロダモ他)

- ①上川方面 9月24日(日)(20名) ②津南方面 10月29日(日)(18名)

6 学び合う会

- ・場 所 長岡市弓町1—5—1 『アトリュウム長岡』

- ・期 日 12月9日(土) 午後4時00分から

- ・内 容

- ・山野草を語り活動を反省する会・忘年会

- ビデオ・スライド上映

7 機関紙の発行

- ・第15号

- ・内 容 (活動のあしあと、感想など)

- ・期 日 12月9日(土)

8 その他

- ・幹事会 7月30日(日)

- ・宮脇昭先生を囲む会 11月30日(27名)

○ 宮脇 昭先生を囲む会開催 ○



先生は、にいがた「縁」の
百年物語小千谷地域推進協議
会主催の講演のため来県され
ました。
勲二等瑞宝章叙勲のお祝い
を兼ねて十一月三十日(木)長
岡市魚藤において先生を囲む
会が開催された。
当会の顧問としてご指導を
いただいている先生と親しく
話を交し、懇親を深めたひと
時であった。

森・緑・花づくりボランティア県民の集い!!

・とき：平成12年11月12日（日）10：30～
 •会場：中之島町町民文化センター

第1部 10:30～

- ◆スライド上映「ふるさと新潟の景観」
 ふるさと新潟の美しい自然や田園風景をスライドで紹介
 ～風景写真家 中村 倭（新潟市）
- ◆活動事例発表会（前半）
 - ①山林ボランチア広場
 - ②エコトピア上越
 - ③イバラトミヨ水芭蕉の会
 - ④魚野川を育む会
 - ⑤NPO法人 木と遊ぶ研究所
- ◆活動事例発表会（後半）
 - ①越路もみじの会
 - ②住吉町花と緑の会
 - ③寺沢緑化クラブ
 - ④新潟県山野草をたずねる会
 - ⑤やすづか花の会
 ～司会 寺泊商工会女性部～

この集いは、「にいがた「緑」百年物語」一本を植える県民運動の輪を広げることをねらいに開催されました。県内の森づくりや緑化活動を行うボンティア団体等が一同に集まり、意見交換や情報交換等を行なながら、相互の連携を深めるというものでした。山野草をたずねる会が活動事例発表に選ばれて小日向会長が発表いたしました。（写真）発表の持ち時間が七分間と短く説明するのが大変でした。小幡副会長の補助で十六枚のスライドを使い、会の活動を報告しました。会からは十一名の会員が参加し研修を深めました。また、第三部の情報交換懇親会が長岡市ニューオータニで五十名ほどの参加数でしたが、会長はじめ五名が参加し有意義な情報交換会でした。報告された要旨は①会の発足と理念、②植物の生きざまに学ぶ活動、③いのちの森との共生を目指したみどりを育てる活動、④山野草の恵みの体験活動、⑤機関紙かしのみの発行と学びあう会について。にいがた「緑」の百年物語推進運動への願いとして、真に求めていることは持続可能な本物の緑豊かな町づくりでふるさとの森の再生です。

第2部 13:55～

- ◆分科会
 - ◎第1分科会「つくる」
 22世紀へ贈る緑の遺産づくり
 一ボランティア活動の課題
 司会 にいがた「緑」の百年物語運動準備会
 - ◎第2分科会「結ぶ」
 都市と農山村をつなぐ
 一上流の森・下流の森の再生と人々の交流
 司会 山林ボランチア広場／にいがた森林の仲間の会
 - ◎第3分科会「学ぶ」
 緑と親しむ子供たちを育てる
 一森林・緑の教育の実践と課題
 司会 NPO法人 森の会／エコトピア上越
- ◆報告会～各分科会の討論内容を報告
- ◆情報交換 懇親会



ドングリで復活 ふるさとの森

育苗に取り組んだのは同会の会員二十人余り。ウラジロガシ、アカガシなど、市内の神社の森などで採取してきた木の実約三千粒をボットと呼ばれるビニール袋にまとめた。木の実は土の中に完全に埋めないようにするのがコツ。参加者は腰をかがめて大事そう

は来月上旬、十二人のメンバーが中国の万里の長城付近での植樹活動に参加する予定。

長岡にハウス 設け本格育苗

県山野草をたずねる会

同会では、既に各会員が庭先などで、ドングリの育苗に取り組んできたが、六十五平方㍍の大きさのビニールハウス内で育てるのは初めて。市内外で森づくりを始めた際の拠点となりそうだ。

同会は持続可能な自然環境を目指して、「ふるさとの森づくり」を進めてきた。環境庁の環境カウンセラーでもある小日向会長(60)は「育苗ハウスは“ドングリ

地域に見合った自然植生（潜在植生）を復活させようと「県山野草をたずねる会」（小日向会長）は二十三日、会員が無償提供した長岡市関原町の用地でシラカシなどの実をまいて、本格的な育苗活動をスタートさせた。

同会では、既に各会員が庭先などで、ドングリの育苗に種を二つ、三つと並べていた。

新潟日報 4月26日（水）掲載記事



ドングリハウス完成

春の恵み

永井多津子

おととしの「春の野を歩き山菜を食べる会」に参加した時のことです。その時は、風谷山の北側にある真木へ行きました。山菜を摘み、山野草を観察しながら、ブナ林の若葉の白いふ毛が空に映え、とても優しい気持ちになりました。春を満喫することができました。摘取った山菜・ヨモギ・クズ・ミヤマイラクサ・コシアブラなどを天ぶらにしました。今まで山菜の天ぶらといつたら、フキノトウくらいしか食べたことのなかつた私は、初めて食べたコシアブラの、パリッとした軽い歎ぎわりと、何とも言えない香に感激しました。それからは、毎年春が来るのが待ち遠しくて、雪融けの声とともに東山へ行き、コガラ・オオルリ・ウグイスの鳥のさえずりをBGMに、山野草や樹木を観察し、コシアブラの木を見つけることができるようになりました。今年は、3回程コシアブラの天ぶらが食卓を飾り、春をおいしくいただきました。

そして、我が家近くにある大河・信濃川のほとりでも、クサソテツ(ゴメ)・ヨモギなどの山菜や、ニワトコ・ヤナギ類など、木々の花が咲き乱れ、さらに、ガンカモ類・サギ類・カワセミなどの野鳥も見ることができます。

春のひととき

吉田千恵子

久方振りにミレニアムの早春の会に参加。愈々、育苗活動が本格化、ビニールハウス(どんぐりハウス)を建てる為の場所を整地して(不慣れな仕事でお疲れ様でした)次の目的地へ向かつて出発。久々にカタクリ、雪割草に逢つた。石部神社のミスミソウも以前に比べ減少しているのはと案じられる。天然記念物のスダジイの花を地域の方達は桜の花以上に魅力を感じ愛しているとの事、見頃は五月二十日前后になります。では……と、これは会長の予想だが一度は対面したいと思つていて。海岸沿に車を進めて定番の夏戸戸へ向う。夏戸城址の隅から登り口は何時もの事乍ら私にとっては険い坂で狸々袴を横目に見ながら漸うの事にて登り切りました。数年前には本当にミスミソウが沢山咲きそろつて見事な花絨毯だつたが、その状態まで回復するのに幾星霜かゝりました。亦、今年もファットンチットで頑張る事に致しましょう。

海景色
眺めつ片栗
雪割草

花に見とれて

青柳 シヅ

四月八日に石部神社につくころ雨が降り少し心配でしたが、ちょうどお昼にあわせたように雨も上り気持よくおにぎりをいただきました。少し休んでからシイの木の林に先生が行かれてその後をついて行きました。シイの木の大木の下には雪割り草と力タクリの花がきれいに咲いていてこんなきれいな山は初めてでした。

雪割草の花が色とりどりで株も大きいのにびっくりしました。

参道のわきにハマダイコンの花が咲いていました。ひたしにすると美味しいと教えてもらい手にいっぱい採つてきて家で少し眺めてからひたしにしていました。

それから夏戸城跡に行き又もびっくり。きれいな雪割草がみごと足のふみばに困つたくらい雪割草が私達を待つてくれました。ようやく山いつぱいに咲いていてくれました。

五月十四日には二輪草の花がみごといく山もいつぱいに咲いていて、採つて食べるなんてかわいそうでした。皆さん採つておられると、私もその気になつて採りました。家に持つて帰り親しい人にわけてやりました。

昼食には採集した二輪草等の山菜でみそ汁やテンプラやおひたしを作りおいしくいただきました。

ありのまゝの心境です

吉原 テツ

去る事今から五・六年も前だつたと思うのですが、幼い時からの憧れの人からのお誘いに喜んで入会して現在に至つております。楽しく勉強をさせて頂き感謝をしております。農家の生れで農家の育ちなのに自然とは気象とか山川ぐらいで、草や木など思つた事もなく山野草などと云う事を考えた事もなく又関心を持つた事もない者でありましたが、だんだんとおもしろくなつてきました。たゞの草木などぐらいしか思つていなかつたのですが道を歩いていても「あれはこれは」と気にかゝる思つていなつたのです。又山野草の事だけではなく、色々の事に出会い色々のお話を聞かせて貰い、良い仲間に恵まれて私の人生に沢山のプラスを自覚をしておられます。無理をしない様に出来る限りガンバりますのでよろしくお願ひ致します。里山の良さをしみぐと感じております。

山仕度で気安く出かけられる事で誠に良い会だな——。今年の春の山、山菜料理は本当に勉強になりました。山上の登山は印象に残りました。すばらしい眺め、日本海の色、東は越後平野、木々の芽吹き、雪割草の花、自然はすばらしいですね。毎回出席したいのですが、なかなか思う様に出来ないのが残念です。老体にムチうつてついて行きたい思いでいっぱいです。よろしく

私が植物に興味をもつようになつたのは、平成元年に「小国の植物」が発行されてからです。カラー写真で美しい植物がついていました。植物の写真を撮つたり解説している人達は「小国生物友の会」の人達です。「小国生物友の会」の代表者は私の中学生の時の生物の先生で、近くに住んでおられます。乾燥標本を作つて色々と教えてもらいました。平成十一年吉原さんから「生命の森」をいただき、入会のさそいをうけました。「生命の森」を読んで私の命の森を読んでいます。



私と植物

青柳 秀雄

フキのとう。雪解けの頃のものがいい。雪降る前のフキのとうは、苦味は峻烈だが、趣が違う。春の山菜はふきのとうに限る。それを二つ三つ食べれば十分だ。気障に聞こえるかも知れないが、数十年来そう思つてきた。サワオグルマ。太い茎は空洞、花は明るい黄色、背丈も結構高い。それを投げ入れたといつた感じの味噌汁を頂戴した。二年前の長岡市栖吉の「山野草を訪ねる会」でのことである。サワオグルマの香りはシュンギクのそれであつた。このときの強烈な印象が今までで最も尾を引いている。「訪ねる会」に珍味の紹介を期待しているのである。



会に出るのが恩返し

小笠原文夫

「会」の内容は豊かである。したがつて、新鮮だし、バランスもとれている。それだけに、役員の方々のご苦労は大変なものだろう。会に出るのが当面の恩返しだろうと、私は思う。た。「植生研究会」もまた素晴らしいが、それでいる。知る人が知つてゐるが、分からぬ者には分からぬナンドカンドという、名のある草木がびっしり生えていた。まさに「いのちの森」であつた。今時こんな林があることに仰天した。石地の皆さんのがいれに感動しました。植物観察の視野を広く開いたと思います。

小国に住んでいて山菜は色々食べましたが、ニリンソウ、オオバキスミレ、コシアブラ等多くの野草は初めて口にするものばかりで、おいしくいただきました。昨年いただいた、ドングリのポットは順調に成育し、新芽も元気にのびました。次の参加が楽しみです。

長岡市東新町の白井マサさんは、フキの甘納豆作りにはまつてゐる。春、そのためにはフキをとりに行き、大量に作つて冷凍保存しておく。人を招いて、お茶うけに供すると、とても喜ばれるそうだ。私共の山野草の会でも毎食時に御馳走になつたが、とてもおいしかつた。

そこで作り方を教えてもらつたので来春はフキの砂糖漬作りに挑戦してみてはいかがでしょうか。白井さんは出張して一緒に作つてみてもよいと言つておられます。

料理紹介

はまつています フキの砂糖漬

- 材料** 山フキ 上白砂糖 (フキの重さの3・5・4割)
作り方
- ①太めのフキ (4kg) を用意
 - ②塩をふつて板ずりする
 - ③茹でる (皮をむきやすくする為)
 - ④皮をむき仕上がりの長さに切る
 - ⑤水洗いしげるに上げて水をよく切る
 - ⑥厚手の鍋にフキと上白砂糖を1・6kgを入れて火にかける (火じゃない)
 - ⑦液がドロッとしたら、割ばし二~三本でかき混ぜる
 - ⑧水分がなくなるまで炒りあげる
 - ⑨早からず遅からずのところで火を止める
 - ⑩紙に括げ、冷めたら容器に入れて冷凍保存する
 - ※煮つめ不足だとダラツとする

山と野に想う

八子 貞夫

ことしの六月で、七十四才というめでたくもあり、めでたくもなく、うらさびしいような年齢となつてしましました。

去年七月末、四十数年来胸にあたためていた思いを果そと、黒部源流の雲之平、鷲羽岳周辺を八泊九日をかけひとり歩きしてきました。

黒部の山をおりたら、第二の人生にさよならし、後はもうけものの第三の人生をどう歩こうかなどと、漠然と思考しているうちに時間は猛スピードで過ぎていきました。昨年の黒部の山々のやさしく静かなたどすまいが、なんとしても忘れがたく、もう一度源流の山あいを歩き、第三の人生は黒部の源流から歩き始めようと、一人で勝手に決め、十七年間山歩きと共にしてきた、気も心も知りあつた岳友4人と、新たに参加していただいた心友を加え、気持をひとつにして、出発の日を待ちわびたのでしたが…。

ローソクの灯が消える直前一瞬輝きを益し、消えるように、この計画も一瞬にして消え去つてしましました。よる年波とでもいうのでしょうか、自分自身の心身等の理由で実行できなくなつたとはいえ、孤独なさびしさが、ひしひしと心を包みこみ、最愛のものを持った時の、やがて、孤独な遊びだと思つています。山歩きは単独でも友と一緒にでも、常に厳しく、辛く常に自分と自分との戦

いであり、これは人生の道程と同じと言いつけるのではないでしょうか。登山道で出会える厳しい風雪から生れた美しく、可憐な高山植物、日の出日の入、ゆく手を拒むかのような険しい山並等、この厳しさ・美しさが人を山にひきつけるのだと思います。

この山の厳しさ・美しさ・やさしさ

を心に焼きつけ、第三の人生は、人をうらまづ・頼らず・怒らずというと仙人ぐらしになりそうなので、少しぐらい人間のおいを残し、ゆつくり静かに過せないかなと、思いをめぐらせ

てはいるのですが、結果は命が燃え尽きる時なのではないでしょうか。

幸い、なごやかな、楽しい山野草の会に入れさせてもらっています。ことしの春、山菜を食べる会に参加しました。

山菜を料理する段取りをボケーと見つめていると、男の方は持参した木を割り、かまどをつくり、お湯を沸かす。女の方は、山菜をき

ぎみ、なごやかな楽しい雰囲気の中で、キビキビと事が運び、実際に手際よく料理ができるがつていく。

この一連の料理作りは、会長さんや、係の方々が役割分担を、あらかじめ指示してあつたとは思えないのです。とにかくなんとも言えない和やかな雰囲気で酔つたようにボヤーと見続けていたものです。すばらしい会であると、席

あらためて感じさせられました。

この日、天ぷらをいろいろ食べさせてもらいました。その中のひとつに、藤の花の天ぷらがありました。花の色そのままの花天ぷらは生れて始めてです。一瞬とまどいましたが「天ぷらにしてごめんね」と心にお念佛を唱えて、口に入れました。食味は?

ここまで書いて少し感

じたことは、花の天ぷらを自分で揚ることでも覚え、あまりしたことのない晩酌でもやり、花天で一杯という隠居心でもボチボチ身につけようかと漠然と考えております。

皆さん足手まといにならないようにそばかりを思い歩いていました。今写真を見てすごい所に行つてきました。富士山もうつすらと見えます。富士山もうつすらと見えました。黄色のキスゲの花が沢山咲いていました。本当に夢のようなすばらしい二日間でした。いろいろと有難うございました。

皆さんの足手まといにならないようにそばかりを思い歩いていました。富士山もうつすらと見えます。

突然の原稿依頼に、文章が一番苦手な私は、吃驚、前回は平成八年との事で、順番が来たのかなと思い、ようやくペンを取りました。

今年は高峰蓼科方面の旅で、初めて

此の頃頭がモヤモヤして何をする事もないとお聞きし、友人と二人で入会しました。そして、靴屋さんで茶色の靴を購入しました。ワイシャツ、ズボンを揃へ、旅行当日は、一番のりで集合場所へ着きました。すっかり子供に帰つたようなワクワクした気持ちと新米だ

栗山勢津子

夏の合宿研修に想う

栗山勢津子

此の頃頭がモヤモヤして何をする事もないとお聞きし、友人と二人で入会しました。そして、靴屋さんで茶色の靴を購入しました。ワイシャツ、ズボンを揃へ、旅行当日は、一番のりで集合場所へ着きました。すっかり子供に帰つたようなワクワクした気持ちと新米だからと後ろに並び出発しました。席



高峰・蓼科方面への旅行

佐藤ミヤノ

栗山勢津子

栗山勢津子

美ヶ原の数々の高山植物と、観光旅行には無い充足感で、感謝感激の旅でした。私は入会以来新潟県の数々の山々、又は温泉地、島等、最近は近県の山々と、十六年程夏の合宿研修に参加して居り、二年程家族の病気で、不参加がありますが、本当に自分では行かれない処へ参加出来、楽しい想い出が沢山出来、又沢山のお友達も出来、私的人の宝物です。これも山野草の会に寄せてもらつて居ればこそと思つてます。今後共何時迄参加出来るかと心配ですが、頑張つて参加したく、会長様始め会員の皆様よろしくお願ひ致します。

挑戦出来ずに いるアルプスの 遠望に感激

佐野 愛子

七月二十三日下界は猛暑の中の高原行きは、全く快適でした。一つに前から登りたいと思つていた黒班山に希望者は、どうぞと云う事で、先生には申し訳ないかとは思いましたが浅間山が真近に望めると云う事で勇んだのですが時間切れで、なだらかな草の斜面だけを眺め急いで下山と云う事になりましたが、翌日の車山のニッコウキスゲには感動しました。いくつもの丘、全てが黄に染まる様に自然の偉大さを再確認しました。と同時に八ヶ岳連峰と南アルプス連峰の間に富士が見え、ずつと追つて行くと中央アルプスの木曽駒ヶ岳、続いて木曾御岳、北アルプス



スと車中からも追いかけ、美ヶ原では残雪の北アルプスを目の前に昼食を取り少し登った所でなんと槍ヶ岳をはつきり見る事が出来、正に日本の屋根全てが一度に見渡せ、雨女で山好きの私には生涯一度しかないのではないかと好天に恵まれ、感謝でした。と云うのも車がパンクすると云うハブニングに会い、待つていてる間にスタンドにて信州トラベルマップなるものを手に入れる事が出来たから確認出来たのです。ハブニングは心配がつきものですが、なんと私には運がついていたと感謝の旅でした。

十月の二十日二十一日とで蓼科山に登つて来ましたが、雲空でやつぱり前記の様なわけには行きませんでした。

美しい地球を子供たちに

—環境講演会より—

金子 久信

七月三〇日長岡リリックホールにて首題の講演会が行われた。講師高木善之氏は、地球環境の深刻な実態を伝える為、二十年勤務した企業を退職、私財を投じ、一日一食で全国各地公演活動を行い、「グリーンコンシューマー」(緑の消費者)になることを呼びかけておられる。

講演はゴミ問題から入り、欧米は日本に比べ焼却炉は少なく、ゴミは企業の製造責任と家庭ゴミの有料化でゴミの削減を計った。しかし日本にはゴミを減らす法律がない。数年で処理場は飽和状態となる。早急な法案化が必要。又猛毒のダイオキシン発生では、先進国は厳しい規則がある。しかし日本はきわめて甘い基準で罰則すら皆無である。

その他環境ホルモン、オゾン層破壊地球の温暖化などでは、「安全が立証されていないから規制をする」という先進国の考え方に対し、日本は「危険が立証されていないから規制はしない」とは、まさにたまむし色の日本の考え方であり、これは途上国的後発の発想である。

日本は数十年前貧困国であった。その頃はむしろ環境の破壊ではなく、大家族を構成し貧困でありますながらも、心豊

環境講演会

かな国であつた。しかし熾烈な国際競争を勝ち、現在を築くそのお陰で国民の生活水準は向上する。がその反面、高度経済成長は、環境破壊をもたらし、その代償はあまりにも大きい。

飢餓と闘い力つき目をおとすエチオピアの少年の話では、会場全体が涙に誘われた。以後環境破壊が進行し食糧不足となる。その時は日本の子供達もこの少年と同じ運命となるであろう。

「その為には、まず事実を知る。できることから始める、その仲間になること、グリーンコンシューマになろう」と講師は力説する。

講演を終え、日本は先進国より数年対策が遅れ、破壊が思わずスピードで進行している。この事実は驚きであつた。日頃四季を通じ自然環境には感謝の念と次世代へ引き継ぐ大切な資源を保護しなければと、心掛けている

も、自分一人で出来る限界を知る。しかし私達にはすばらしい会がある。

「自然を知り自然から学ぼう」という趣旨の「山野草の会」は正に自然環境を保護する会であり、ここには同朋百二〇名の皆様が自然保護に努力されている。私はこの会のメンバーであることに喜びを感じています。



万里の長城植樹活動



中国に行つてびっくりすることは人が多いということだ。中国もGWに当たつていて万里の長城や故宮などはまるで人の川だ。十二億人の人口はものすごい数だということを実感した。また、信号機の設置が十分でないせいか交通のマナーが悪く、どこでも人が横断している。その中をものすごい速さで車や自転車が動き回っている。すさまじい活気を感じた。

メインの植樹は、中国側の準備がとてもよくできていた、我々約二千人がどつと押し寄せてもいいように場所も施設も整っていた。我々はただスコップで穴を掘つて、モウコナ人で将来教員を目指すというお嬢さん手は息子の嫁にしたいようなかわいい人で、英語ができるらしく英語で話すと分かるみたいだつた。私は全部で二十近くの苗を植えた。がれきのような山に果たして根付くのか心配であるが、十年後にどんなになつたか見に来てみたいと思った。果たしてその時まで元気でいられるのかどうか。木はうまく伸びるといけば百年生きるといふ。自分が死んでもあることなどはない。そんなことを考えただけで壮大なロマンを感じることができる。思い切つて行つてよかつたと思つてゐる。



中国奥地で生き続ける樹木

小幡 和雄

訪中雑感

大浦方 悅

北京市緑化委員会より贈られた感謝状

年度始めの幹事会の席で「第三回日中植樹ボランティア」募集の声がかかつた時、迷いもせずにその場で申し込みました。なぜならば、中心になつて指導される宮脇昭先生の小出での講演会で「国境を越えた森づくり」にすっかり感銘していたのです。

実際に参加してみて、日本からの七百人、地元中国の千人、中には二回目、三回目という人達ともお話しでき、その熱意に圧倒されました。

宮脇昭先生の国際的なご活躍の姿又中国の長い歴史と近代都市、そしてパワーリ溢れる人の波。何かも想像以上のことでした。

中国語に何の心得もなく参加し、手話のような会話にもかかわらず、一緒に植栽した師範学校の女子学生のさわやかな笑顔にコミュニケーションとは言葉ではなく、心で通じることを実感いたしました。

又同行者の中には母親と共に参加した小、中学生の小幡三兄弟の帰国後いただいた寄せ書きのハガキには、次世代を担つてくれる頼もしさを感じました。私達の会も「ドングリハウス」に「おもしの森」と活動の拠点ができ、少しづつ夢が実現に向い、一人でも多くの人達に輪を広げたいものです。



編集後記

北京市延慶縣綠化委員會

二〇〇〇年五月四日

「かしのみ15号」ができあがりました。お忙しい中、原稿をいただきありがとうございました。
今年は、計画的に原稿をお願いしてスムーズに編集ができたことを喜んでいます。会の理念が理解され、仲間が増え活動が充実していることを大変うれしく思っています。(小幡・木曾・細川)